

アカシア夜話 アカシアンナイト
第3話

井内慶次郎先輩を追悼して

平成19年12月25日、文部省事務次官などを歴任され、文部行政に多大な足跡を残されるとともに、東京アカシア会の会長を勤められるなど、母校やアカシア会に大きな貢献をされた、井内慶次郎先輩(32回)が突然ご逝去されました。

今回のアカシア夜話は形式を少し変更し、広島と東京で開催された追悼座談会の様子をご紹介します。

広島では2月22日に石井泰行アカシア会会長(43回)、景山三平前校長、前川功一広島経済大学学長(52回・前広島大学副学長)の3人が、東京では2月25日に田中敬元大蔵省事務次官(32回)、山口信夫前日本商工会議所会頭(33回)、児玉幸治元通産省事務次官(43回)が集まり、思い出を語り合いました。



百周年の祝賀会で乾杯の音頭をとる井内さん

広島の座談会

石井：井内さんは伍堂輝雄さん(14回)の後、昭和40年代半ばに東京アカシア会会長を務められました。それまでは、東京アカシア会は槐(えんじゅ)会と言って、附属の大先輩の経済人ばかりの私的な集まりでしたが、伍堂さんや井内さんのころから、卒業生なら誰でも入れるようになった。アカシア会らしい雰囲気ができてきた時期です。私は、事務局担当として井内さんに仕えましたが、きちんとした人でね。去年の年末に夫婦で年賀状を投函して、何もかも済ませて旅立たれました。最後まで井内さんらしかったですね。前川：広島大が独立行政法人になった時に、外部の有識者と内部と半々で作る

大学運営協議会に入っただき、助言をいただきました。広大を本当に大切にしてください。年に4回開く協議会の前に、事務局と議題の説明に伺うのですが、座談の名手で、非常に記憶力が良くお話が面白い。附属のころのお話で、先生に「井内君はいるか？」と当てられて「いないです」というジョークや、肩を脱臼した時の治し方などよく覚えています。私の父、前川力は18回卒業で、広大の理学部長をしていたのですが、全国の理学部長会で、当時、文部省で大学関係の担当をしていた井内課長と親しくさせていただいていたようで、「あの前川学部長の息子か」と言ってずいぶん可愛がっていただきました。景山：私は井内さんから見れば随分、若輩なのですが、母校の校長という立場を尊重して、リスペクトを持って接していただきました。毎年4月の年度初めに、校長と副校長は井内さんが会長を務めておられた日本視聴覚教育協会(東京・赤坂)に、挨拶に伺うのが慣例になっていました。南村俊夫さんが副校長の時にはもう始まっていたらしいですから、創立80周年以前から行っていたようです。この時、禅問答をして帰ってくるんですが、手帳を整理してみると、これを含めて2003年4月～07年3月の校長在任中の4年間に11回、親しくお話をさせてもらいました。一番印象に残っているのは、アカシアの百周年記念誌を発行する際に、編集責任者の小山清元副校長が、井内さんに巻頭言をお願いしたところ、頑として受けていただけでない。「自分より先輩で、阿川弘之さん(29回)も含めて達者な方がおられるのに、私が書くわけにはいかない」とおっしゃる。最後は、私が校長としての立場でお願いに伺うと、引き受けてくださいました。それぞれの立場、肩書きの人を立てて、ご自身は一步引いて、絶対に自慢話のようなことはなさらない方でした。



石井泰行さん、前川功一さん、景山三平さん

前：私が広大の副学長をしていた2004年ころ、広島市中区千田町の広大跡地に、翠町の附属をまた移転させようという構想がありました。東雲も含めて移転し、小中高の校長も1人にするという構想で、設計図まで書いて、井内さんに相談に行ったことがあります。「いい案だけど、難しい話だ」とおっしゃいました。結局、文部科学省がそんな金のかかることはダメだということを実現しませんでした。文部省を退職してからも、後輩と20年も30年も温かい付き合いが続く。この案を曲がりなりにも検討いただけたのは、井内さんの人間性によるところも大きいと思います。石：他の省ではないね。親分肌で、後輩から慕われていました。



2003年、視聴覚協会の事務所にて

景：井内さんには「明治文教の曙」(雄松堂)という著書があります。幕末、明治からの文部行政の歩みをたどったすごい記述で、初等中等教育の現場にも目を光らせ、歴代の現役を指導してきた井内さんだから書けた著作です。石：附属の建物ははずいぶんオンボロですけれど、先生方が聞いておられる井内さんの尽力というのはどうでしたか。景：06年6月に附属学校へ来ていただいて、附属のビジョンなど説明して、その後の補正予算で、福山と合わせて約4億2千万円の耐震補強の為の予算がつかしました。私たちは、もっと大きな改修を望んでいたんですが、それが今年度、小学校の大型改修や新しい棟の建設にかなりの額の予算が通り、目立たないところでかなりの努力をしてくださったんだと思います。前：文部科学省に附属の増改築もお願いに行ったこともありますが、文科省は国立大学の増改築は認めないという方針だし、附属より古い所もいっぱいあります。時代が悪かったんですね。景：附属の教育は、進学率云々でなく、内容に偏りのない教養教育です。全人教育であるだけに、しんどいですがそのあたりのことを理解して、皆実の本校だけでなく広島大学全体の附属のことを考えて、陰に陽に尽力してくださいました。

東京の座談会

○入学のころ

田中：昭和11年、僕は袋町小学校から入学したんだけど、井内君は本川小学校。1学年が84人で、そのうち附小から19人が入っていたね。**山口**：私は千田から入ったんですが、中学から入った65名というのは、それこそ全国から入ってきたという感じでしたね。**田**：僕は南組の副級長で、井内君が北組の副級長。毎日朝礼があるんだけど、その前に副級長が点呼をする。今でも名前を覚えてるけど、「相原、青山、安達…」ってね。それを井内と僕がずっとやらされちゃって。**堀**：僕らの頃も始めのうちは毎日朝礼があって、先輩達は皆昔のままのスタイルでね。僕は芸備線で汽車通学なんですけど、市内電車なんかに乗ったらまずだめで、上級生が「この中に電車に乗ってきた奴がいる！」と言われて、誰も手を上げないと。**田**：連帯責任！**堀**：「女の子はあっち行け」と追っ払われてね。「貴様ら、有態に言わないのは全員の責任だ！」っていうので、全員ぶん殴られてました。(注・児玉さんは新制中学の第1回生。旧市内は徒歩通学が原則だった。)



1年北組の集合写真

○スポーツ

田：運動部はね、我々の頃はサッカーとバスケットだけ対外試合が出来ました。あとはクラス対抗とかしてました。**田**：それで曾田君(和之32回・第2話登場)がね、まず籠球班を作って、彼に誘われて私や井内君、1年後に山口君が入ってバスケットをやりました。3年生になったら井内君と一緒に排球班を作って広高(旧制広島高校)に練習試合に行っただけです。井内君はバレーボールがたいへん好きでしたね。**田**：バスケットは私が5年生の時に1・2年生が広島市内のジュニアの大会で優勝しました。小さな試合で、しかも勝ったのは下級生なんですけど、本当に感激しましてね、今でも一生の思い出ですよ。サッカーは昔から強かったけど、バスケットもね！

○サッカー

堀：サッカーはちょうど私らが1年生の頃、昭和22年の正月に中等学校全国大会で優勝しましてね。4年生で長沼健さん(39回・元日本サッカー協会会長)なんかがやってたわけです。**田**：その頃に私が復員して南方から帰ってきてね。僕はサッカーもしてたから、冬休みに文理大のグラウンドで先輩面をして長沼を教えたんだね。**田**：全員サッカーでしたからね。校庭のアカシアの木の間をゴールにして、休憩時間にはボールを蹴ってましたね。しかし、井内さんも田中さんも運動神経ありましたよ。人数少ないし、校内のクラス対抗は、運動神経がある人は水泳から何から皆出るんですね。**田**：入学の時の84名が2年生から幼年学校に行く人が抜け、4年から高校へ入る人、陸士や海兵に入る人が抜けて、5学年の総数が常に400人を割ってました。それだけお互いが顔見知りになって、仲が良くなるんですね。

○高校・大学・学徒出陣・文部省

田：井内君は4年修了で広島高校に入りました。**田**：広高はともかく田中さんの一高は、4修で入れるような所じゃなかったです。**田**：井内君は早生まれでね、私より1年先に東大に入りますが、学徒出陣は1年後。私は昭和18年の12月に陸軍に入って南方に出征したんですが、井内君は19年12月に海軍に入り東京の芝浦補給所と言う所において、終戦になったらすぐ復学できたんです。**堀**：それで次官になったのが、井内さんや3年下の粟屋さん(敏信35回・元建設省事務次官)が先で、田中さんが少し後になったんですね。**田**：粟屋さんは戦争が関係なくてスーッと行ったんですね。私が若いころ、当時大蔵省の主計官をされていた、ソ連での抑留で一緒だった相沢英之さん(元衆議院議員)が「銀座で飲んでるんだ、来い」って言うので行ってみると、当時文部省会計課長の井内さんが一緒におられ、上半身裸で「おい山口、校歌を歌おう」とか言われて、元気良かったですよ。井内さんはちょっとパンカラでしたからね。旧制広島高校の時はストームなんかやってね、電車をしばしば止めたりしましたが、中に井内さん入ってましたよ。田中さんはね、黙っていても、すらっとしてもてるからね、かっこよかったですね。**田**：当時はそうでしたね。僕も附中時代からスポーツなどを通してそういう彼を良く見てたし、仕事での情熱を見



激励会 昭和51年7月築地・河庄にて

てそういう面の井内君をずっと見てたんですが、最近書かれた彼の随筆を読んでみると、情緒豊かな事も沢山書いてあって、ああ、井内君にはこういうロマンチストな面も有ったんだなあと感じました。感激をしたんですけれどね。**田**：井内さんは官房長を2回やっておられましたね、1回やった後、大学紛争があったのもう1回。だから大官房長でしたね。**田**：井内君は会計課長もやり、官房長もやったんで、僕は蔵省主計局ですからね。彼の予算折衝をやる情熱というのは、それはもう大変なものでしたね。本当に、あんな情熱を持って教育行政に当たった人は居ないと感じますね。

○母校への貢献

田：人柄も良かったし、人の面倒も良くみられましたからね。文部省の関係で物凄く人望がありまして、文部省も本当に井内さんの言う事を良く聞きました。母校の為にもずいぶんご苦労されたんじゃないかと思いますよ。



90周年の祝賀会にて

堀：そうなんです。私が東京アカシア会の会長をやった頃、東京に母校の校長先生なんか来られると必ず「我が附属」がどうなるかと言うのが話題になる時期があったんです。だけど井内さんは「心配するな」と。何をどうするのかおっしゃらないんだけど、何かやらなくちゃいけない時には君らにもちゃんと言うから心配するなと。**田**：戦後、各県に国立大学ができて、全部教育学部ができましたからね。だから母校も同じ附属学校だから、他と同じで良いじゃないかという意見が非常に強かった。広島大学の教育学部は

旧制高等師範などで、これを最後まで守ろうとされてましたね。H：戦前の中学で国立なのは東京と広島の高師附中だけだからね。M：それと、学習院も国立でした。

○追悼

H：しかし井内君っていうのは、本当に悔いの無い一生だったと思いますね。あれだけ一生懸命、教育行政に情熱を注いで。最近の10年くらいはゆとりもできてこういう随筆を書いたり、自分の時間を持って豊かに生きたというので。本人には悪いけども、苦しまずという事で、本当に大往生で。M：日曜日にね、広島から送ってきた牡蠣をおいしい、おいしって食べて。それで奥さんと一緒に、日中に書いた年賀状の宛名を全部書き終えて、ポストに入れに行き帰られてね。誠に満足して「それじゃあ、おやすみ」って、それから大往生。H：そうですよ。だから本人が亡くなってるのに年賀状が来たというのは、前の熊野君(英昭46回・元通産省事務次官)の時もそうだったけど、正月に年賀葉書を頂いて「ああ、お元気なんだな」と思って、ご逝去を知らない方が沢山居ましたね。

○郷里に思うこと

M：いつも広島のこと、母校のことを思っています。いい学校であって欲しいし。後輩が学生らしく堂々と、いつも夢をもって頑張ってくれる事を願っています。附属の生徒として、満足した学生生活が送れる環境で青春を謳歌して、将来社会に貢献できるようになって貰えば良いと思っています。日本は人だけが資産です。先の戦争で破壊されま

したけど、人々の勤勉さや教育、技術などは残ったんです。それで今があるんですから。人の教育というのは、家庭教育、社会教育を含めて、立派で強く自慢できるような若者が育ってこれなければ、これからの日本は幸せにならないんじゃないかと、このごろつくづく思います。H：私も広島の時代を思い出して、附属中学は、こんな優れた教育を授けてくれる学校は他に無いと思います。そういう意味で母校にいつも心から感謝しています。子供や孫の受けている学校教育を見ると、僕なんか附属で受けた教育と格段の差が有ると思います。そういう意味で「心のゆとり」とか「公德心」「道徳心」がしっかり身につくような教育を、生徒諸君や先生方には心がけて欲しいと思います。



元玉幸治さん、田中敬さん、山口信夫さん

H：広島への先行きについては、本当に難しい所があるんですよ。私は通産省以来、地域振興に関する政策を出して広島の反応を見てると、いつも動きが遅いんです。気候が温暖で、食べ物は美味しいし、ある意味バランスの取れたそこそこ幸せな地域が出来ちゃっていて、殻を破れないでいるんだと思

うんです。道州制の問題をとってみても、広島はどういう風な位置づけになるんだろうという事、岡山の人にはものすごく考えているんですよ。だけど広島は、当然に今の様な状態です。だから、その辺りの感覚をうちよっと高めて頂いた方が良くはないかと思っています。そういうところから、色々な物を活性化していくようなエネルギーが出て来そうな気がします。

編集にあたって

広島でも、東京でも井内先輩の思い出と共に母校や広島への想い等、話が尽きる事はありませんでした。ここに紹介できたのは、ほんの一部にとどまる事をお詫び致します。

井内先輩を思い出す「アカシア会の同窓生というのは、同じ女性に初恋をした仲間のようなものよ!」とにこやかにおっしゃられていた姿が目につかびます。

長きに渡り、母校、そしてアカシア会がお世話になりましたことを感謝し、これからも、お浄土から我々をお見守りくださるようお願いして、追悼のペンを置きます。

(本文中、先輩に対する敬称は「○○先輩」「○○さん」に統一しました。)

文責・編集：甲斐 稔(63回) 編集：山手秀之(70回) 河本良子(63回) 協力(東京アカシア会)：大澤郁枝(52回) 尾籠裕之(56回) 中村 英(57回) 兼森孝(60回)

『新・教師列伝(下)』刊行される!

(元副校長 小山 清 著、B6版、97ページ)

平成15年2月から19年1月まで、会報誌面に48回にわたり連載された「教師列伝」では、多くの元教官の横顔が紹介されました。その中から150名の先生方を描いた『新・教師列伝(上)、(中)』が、これまでに上梓されています。

このたび最終編として、小山先生最新の力作『新・教師列伝(下)』が4月に刊行されました。明治～昭和40年代に在籍された元教官84名のほか、巻末には尚志会(明治35年に開校した広島高等師範学校の卒業生を母体とし、現在その流れを継いだ広島大学文学部・教育学部・理学部の卒業生で組織されている同窓会)の物語も掲載され、興味をそそる内容となっています。

ご希望の方は、1,000円(送料込み)を添えて、アカシア会事務局までお申し込みください。(1月全国版で予約して下さった方には既にお送りしております。)上巻・中巻も各1冊1,000円で販売中。

—「新・教師列伝(下)」の内容—

掲載されている先生方：[明治時代に赴任] 牧 一、原 貫之助、永野武一郎、篠崎敏治、松原 厚、飯島東太郎、山田権三郎、横手元伸、山本政人、川手笹市、上野賢知、[大正時代に赴任] 梅林寺 昂、幣原 坦、守内喜一郎、山本 寿、浅井 実、塚本常雄、安部 新、山口俊彦、中田俊造、石黒 立、西田利八、井芹善蔵、森田良克、清水芳徳、長谷川与三治、松村修三、安達成之、金光弥一兵衛、大浦精一、渡辺豊一、古屋袈裟丸、高橋彦三郎、津田芳雄、内田泉之助、一色智二、華岡鋭藏、関原吉雄、林 実、湯浅初男、大槻正一、佐藤仙一郎、[昭和時代に赴任] 堀尾茂光、柳井可也、戸田豊三郎、奥田 明、嵐 紫郎、佐藤清太、竹内尚一、結城清一、鎌田芳雄、榊井迪夫、山本博之、塚部 正、山口義男、山崎英夫、菅 正巳、仲 頼次、寺田角一、[昭和20年以降に赴任] 寺田照之助、田中浩造、錦部 昇、清水 博、多幾山治子、原田直紀、三迫初男、石田一三、御沢金弥、岩竹 亨、植田八郎、杉山 巍、小野文子、森岡文策、和田日出夫、オールピン、カルグレン、三好 稔、常重八重子、岡村貞雄、白神澄二、板野暢之、丸本婦美子、村上 誠、萩野源一(以上84名・全員書き下ろし)

